

17-5 授業解題

授業者：高田 敏尚 先生

授業タイトル：私たちとグローバル化の課題

対象：高校1年生

教科（領域）：現代社会

1. 【グローバル人材育成の観点からみた】本授業の「強み」

本授業は、生徒たちが身の回りの「国際化を示すモノ」を持ち寄り、グループごとにそれを紹介するという授業である。現代のグローバリゼーションを身近な「モノ」に焦点を当てながら分析、理解することが求められているといえる。生徒たちはアニメ、スマホアプリ、スポーツシューズ、異文化についての書籍、外国製の自転車などについて興味深いプレゼンテーションを行った。

そんな本授業の「強み」であるが、これは本授業だけではなく、すでに同クラスで年度当初（5月）に行われていた学習を承けたものとしてこれを理解することで明らかになる。授業者によれば、このクラスの生徒たちは5月に「あなたにとって国際化とは？」を主題とした学習に取り組んでおり、そこで確認した理解の定着や深化のもとに本授業のプレゼンテーションが行われているかが、本授業の焦点であった。その意味で本授業の第一の「強み」は、生徒たちのグローバルな視野や思考の発達・深化を中長期的に育てようとする点にある。

そのうえで、よりグローバル・エシックスのモチーフに踏み込んだ特徴としては、プレゼンテーションの前後にさりげなく置かれていた、グローバル世界の価値葛藤についての学習があげられる。例えば本授業では、導入として「エスノセントリズム」について既習事項の確認が行われている。また最後のワークシート記入に先立って、世界各国の男女格差とそのランキングにおける日本の位置について新聞記事の紹介があった。これらはまさにグローバリゼーションが持つ価値葛藤の側面を表すものであるが、生徒たちの学習活動の要所でこのような事項が織り込まれることにより、生徒主体のプレゼンテーションがメインでありながら、そのプロセスにグローバル世界の価値葛藤の問題に生徒たちが自然に取り組むよう組み立てられていた点も、本授業の「強み」と言える。

2. 授業のさらなるグローバル化に向けて

生徒たちのプレゼンテーションの質からみても、グローバリゼーションの学習としてすでに高い完成度を備えた本授業には「ないものねだり」ではあるが、文化間の価値葛藤の側面が、もう少し生徒たちのプレゼンテーション本体において明確に主題化されれば、よりグローバル・エシックスの性格の濃い学習になるようにも思われる。もちろん、授業者が価値葛藤の側面を強調し過ぎれば生徒たちの主体性が失われる可能性もあり、一筋縄ではいかない課題設定であることは間違いないが、検討に値するものと思われる。